1989年9月1日発行（毎月1回1日発行）
昭和23年7月9日　第3種郵便物認可

建築文化

9

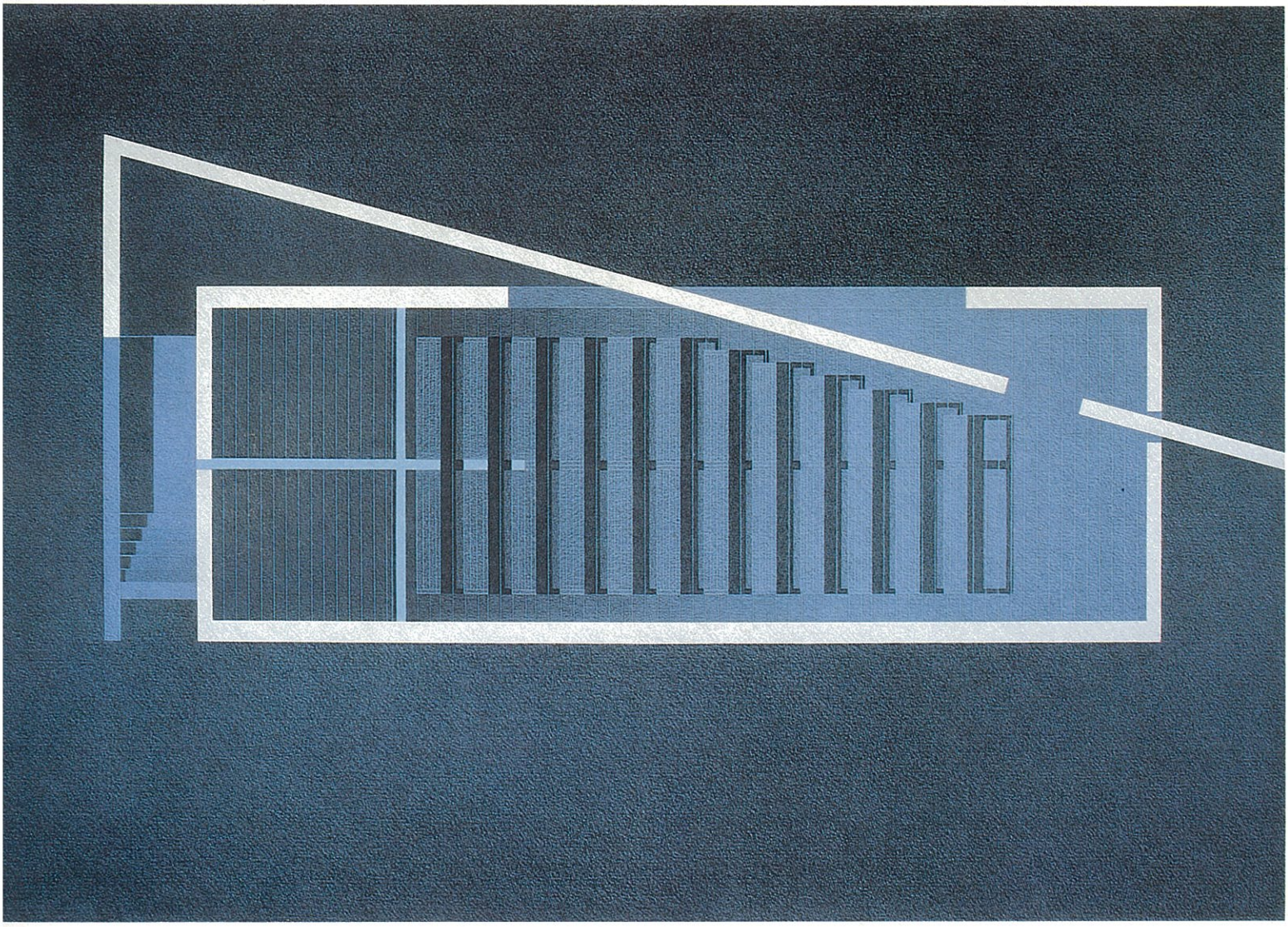
KENCHIKU BUNKA VOL.44 SEPT.—1989 NO.515

特集Ⅰ:劇場PART4
ホール建築から劇場文化へ

特集Ⅱ:行動する地域の建築家たち
変容する沖縄の風景

作品:長谷川逸子、毛綱毅曠、安藤忠雄、山本理顕、小宮山 昭、石山修武

連載]戦後、建築家の足跡〈8〉……池辺 陽



那覇発

アナーキーな香り

内田栄司

アナーキーな状態にならないように取りまとめる仕事が，アーキテクトの本来の仕事だとばかり思っていた。が，事もあろうに中央のある高名な建築家の設計による沖縄県庁舎は，工事が進捗するに従って，那覇の街にアナーキーな状況を助長して，混乱の火の手に油を注ぐような結末がはっきり見えてきたように思われる。

戦災が原因で出来てしまった自然発生的に密集しているゆとりのない街に，建設可能な無料の土地があるから安上がり，といった安直な動機で，不釣合いに巨大なボリュームの施設群で覆い尽くしてしまおうとは。困ったことである。政治家はいうに及ばず，高名な建築家までもが，生活者のための長期的展望に立ったまちづくりに対して，知らぬ存ぜぬの体だったのだから。

去ること6年前，県は，新県庁舎建設に当たり，当初適地として予定していた天久開放地（米軍からの返還地で，那覇市街隣接外縁部に位置する絶好の広大な敷地）に見切りをつけ，既存施設をクリアーにしての現在地建て替え路線で踏み切ったのだった。これに対し，まずいと直観した地元の若い建築設計士たちを中心に相互に呼びかけ合い，40名ほどが結集してきた。そして日夜討議を尽くし，〈DIS-CONT〉と名づけたまちづくりへの市民運動として発展させた。また，そのまちづくりの観点から，県の決定の変更を迫るべく1年余にわたる活動を展開したのだった。折しも東京の生活に区切りをつけて，揚々と沖縄に身を移して間もない頃の私だったが，この動きにひどく共感を覚え，精一杯加勢したのだった。このことには，ある場所で設計活動をしていくうえでの，極めて重要な問題が潜んでいるように思う。

生まれ育った古巣でもない場所へ人を引き寄せる沖縄という所は，よほど強烈な何かを孕んだ所なのだろう。また，学生の頃から幾度となく往来して，ますますこの場所へと私の気持ちが傾斜していったようでもある。

ところが，いよいよ念願のこの地へと身を移したばかりの私は，その翌日からひとつの大きな感情の変転に見舞われた。これは，あまりにも当然すぎる明快な現象だった。というのは，沖縄に対して，それまでの「部外者」から「当事者」としての立場へと反転させることが，身を移すという行為そのものであったからだ。通過者としての目には，ミソクソすべてが情緒たりうる。それが「当事者としての眼差し」にスイッチされると同時に，すべてが身近な問題として良否・善悪・美醜などの冷厳なる審判が，私の内面でフル回転の始動を起こしたのだった。この予想外な感情の変転に，日々の不満感と不快感とがごちゃまぜにうっ積していき，やがて平静さを取り戻すといった顛末だった。

こうした貴重な経験から，大袈裟に言えば，ある悟りを得たように思う。それは，「当事者〈＝生活者〉の眼差し」を抜きにして，その地域の建築をつくることへの，畏怖の念であり，また異質な風土への理解の容易ならんといった認識だと思っている。気候のことひとつ取り上げても，通りすがりでの断片的印象のはぎ合わせでは全く駄目である。どうしてもその地域に住（＝澄）んで，3年4年と季節を重ねる時間，空間の連続性の中で，初めてあれやこれやと思わぬ発見が始まる。そして，地域の人びとの欲求が会得できるものだと考えるようになったのだ。

高名な建築家諸氏が沖縄に建築を設計するとなると，具体例を挙げるまでもなく，どうして極度に羽目をはずしたがる傾向が強いのか。分かる気もする。それは，どうも沖縄という地域が放つ「アナーキーな香り」の魔力に原因がありそうだ。こういう私自身もその誘惑に乗せられて，ついフラフラとやって来た口の一人だったのかもしれない。

しかし，この「アナーキーな香り」には，単に南国的開放感とかいう要因だけではなく，実はもっと他に理由があってのことであると，最近解読できたようだ。つまり，いわゆる「オキナワ病」などと呼ばれている病のごとき現象があり，その病原（？）がこの香りの元ではなかろうかと。この病というのは，ひとたびこの沖縄の地に足を踏み入れた他所者を，この地の虜にしてしまい，ついには呑み込むようにして引きずり込んでしまうことがあるといった，不思議な現象をいう，相当歴史のある病のことなのだ。

結論的にこの現象は，沖縄も本土も，表面上は似たり寄ったりの生活文化を共有しながらも，史的社会的基層においては，全く異質とさえ考えられる要素を多分に孕んでいることに起因してくるようなのだ。例えば，一説では，西暦1511年は，日本と西欧とが初めて出会うことになる，文字どおり歴史的に記念すべき年であったということ。その日本とは琉球のことであり，スペイン人とインドにて鉢合せしたのが，最初であるらしい。その当時琉球国は，国際交易によって繁栄を図り，したがって武力はいっさい持つことなく平和外交を当然とし，西欧人を驚かせたとも言われている。また大陸中国には，ことのほか可愛がられ，大航海時代の黄金文化を築く礎となっていたという。こうした歴史的背景から，琉球人は国際的感覚が洗練され，異国人と差別のない交流意識から，中国人街等々の特定の街区の形成が全くなかった。沖縄のおおらかで大陸的な開放性は，私にはかなりのカルチャーショックだったと記憶している。「オキナワ病」というのは，実は「ニッポンホンド病（？）」と裏腹の関係にあることに，すでに気づかれたかと思う。それは，善し悪しということではなく，相互に「相対化」しうる，独自の異質な領域性を見て取れるということなのだ。

「アナーキーな香り」とは，故にアナーキーそのものではなかったのだから，香りに惑わされて思い違いをせぬように。また，決してアナーキーな状況を助長したり，一人芝居を演じ過ぎたりすることのないよう，やはり「当事者の眼差し」をもって，生活のオルガナイザーとして建築を考えていきたいものだ。

内田栄司（うちだ えいじ）
1948年　東京都生まれ
1972年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1974年　同大学院理工学研究科修了
修士論文「沖縄久高島計画'74」（佐藤武夫賞受賞）
1974年　竹中工務店東京本店設計部勤務
1982年　同社退社
同年　沖縄へ移転
1984年　BAU設計集団設立

"いささか潤いのない街，那覇にキツイ冗談!?"後方が沖縄県庁舎（撮影筆者）